

三島はなぜタイか

——『豊饒の海』から——

下 河 部 行 輝

三島は、タイのバンコックへ二度行っている。一度目は、昭和四十年だが、その年の三月十日、ロンドンでの英国文化振興会の招待で渡英した後、九月五日、妻の瑤子夫人とともに、世界一周に出掛けた。その出発は、『豊饒の海』の巻一である「春の海」の第一章から第三章を『新潮』に提出した後である。この旅行で、東南アジア各地を訪ねているが、一つは「暹の寺」の取材をも兼ねていた。この旅行で、三島は、カンボジアでアンコール・トムを訪問し、バンコックでは、ワット・アルンを調査している。^(注一)

二度目は、昭和四十二年九月二十六日、インド政府の招きで、夫人同伴による渡印、この旅行では、取材を兼ねて過密なスケジュールで、二週間、インドを走りまわった感がある。その帰途、再びタイとラオスを訪ねているが、この時は夫人は先に帰国している。タイでは、徳岡孝夫氏が世話をしている。このことは『悼友紀行』で氏が触れている。

それまで、三島は東南アジアの旅行はしたことがなく、主に、欧米の諸国を廻るのが常であった。最初の海外旅行であるギリシ

ヤを始めとして、この昭和四十年以前、三島は、昭和三十五年十一月にやはり夫人同伴で世界旅行を敢行しているが、この時も、アラブ連合までは行ったが、東南アジアまでは足を延ばしていない。従って、三島が、二度に亘るこの東南アジアの旅行は、明瞭に、『豊饒の海』の為であることは論を俟たない。第一回の取材旅行においては、三島は、タイと決めていたかどうか甚だ訝しい一面がある。まだ、どこにその地を定めようか、心底では決め兼ねていたものではないか。最終的には、二つが候補として三島の心の中に去来していたものではないかと思われる。^(注二) それは一つはカンボジアであり、もう一つはタイであったのではないかと言うことである。結果として、三島はこのクメール文化の地を選ばなかった。三島は、このアンコール・トムを見た時、又若い魔王の彫像を見た時、「バイヨン大寺院を建立したジャヤヴァルマン七世が、癡にかかってあたといふ伝説が、私の心に触れた。肉体の崩壊と共に、大伽藍が完成してゆくといふ、そのおそろしい対照が、あたかも自分の全存在を芸術作品に移譲して滅びゆく

芸術家の人生の比喩のやうに思はれたのである。生がすべて滅び、バイヨンのやうな無上の奇怪な芸術作品が、圧倒的な太陽の下に、静寂をきはめて存続してゐるアンコール・トムを訪れたとき、人は芸術作品といふものの、或る超人間的な永世のいやらしさと思はずにはゐられない。壮霊であり又不気味であり、きはめて崇高であるが、同時に、嘔吐を催させるやうなものがそこにはあった。私の心にたちまち後期浪漫風の音楽が湧き起こり、戯曲の骨子はその晩のうちにアンコール・ワット門前のホテル、オーベルジュ・デ・タンブルの一室で出来上がった。(注三)とまでに三島にとっては印象深く、またこれほどの感興を巻き起こさせた処でもあったのだが、結果として選ばなかったのである。しかしながら、三島は、昭和四十四年に、「海」の七月号に「魔王のテラス」を発表している。戯曲として三島の感興は蘇ったのである。二度目のタイの訪問は、既にこの地を「豊饒の海」での場として選んだ後の取材旅行であった。

ここで、「豊饒の海」ノートに触れておかなければならない。「大長編」ノートより」では、タイに関したメモは、第三部にのみ記されていることである。「春の雪」ノート」以下の記事と、「大長編ノート」との書かれた時期の差異が明瞭ではないが、「春の雪」ノート」以下のメモで、タイのメモが最初に見出せるのは、「奔馬」ノート」で、「バンコックで病人を見る」とある。ただ、「大長編ノート」の「二・二六峰起直前、

父（北一輝）が息子を救ふために、南国へ飛ばす」とあって、はっきりとタイとは書いてないが、発想としては、タイと決めてもよからう。だとすれば、カンボジアは、「もしかすれば」という候補に過ぎなくなろう。

2

三島はなぜタイを選んだのか。これに対する私の考えを述べる前にまず、三島がこの大作「豊饒の海」を書こうとした意図を探って見たい。

三島は、昭和四十四年二月廿六日の「毎日新聞」で、「豊饒の海」について」を掲載している。この時点では、作品は完結していたのではなく、雑誌「新潮」（昭和四十四年二月号）に、「晩の寺」の連載第六回目として第九章を載せていた。雑誌の発行は二月一日となっているので、もしかすれば、第七回分は出来ていたであろう。なぜならば、雑誌「新潮」三月号は、発行が三月一日となっているので、既に印刷は完成していたはずであるからだ。三月号では、——本多が印度旅行から帰ってきて、チャクリ宮で月光姫と会い、姫を振り切って車で逃げるようにして去るところ——までを書いている。章は十一章目である。「晩の寺」は、四十五章が最終章であり、それが、載ったのは、昭和四十五年の四月号であるから、章としては、四分の一位のところで、「晩の寺」の完成の約一年前ということになる。「豊饒の海」について」で、この大作の四巻についての構想の手の内を見せている。「私

は『豊饒の海』を四巻に構成し、第一巻『春の雪』は王朝風の戀愛小説で、いはば『たわやめぶり』あるひは『和魂』の小説、第二巻『奔馬』は激越な行動小説で、『ますらをぶり』あるひは『荒魂』の小説、第三巻『曉の寺』はエキゾチックな色彩的な小説で、いはば『奇魂』、第四巻（題未定）は、その書かれるべき時点をふんだんに取込んだ追跡小説で、『幸魂』へみちびかれゆくもの、といふ風に配列し、第三巻の取材のために、東南アジアへ二度旅行をしたほか、國內の取材にさまざまな方のお世話になった。私の取材はひとへに小説のミリユーを大切にするためである。章の数から言えば、四分の一なのだが、三島は、『進行状態はまだ第三巻『曉の寺』を三分の一弱書いたところである』と書いている。『曉の寺』は全集で、三百四十九頁で、第十一章までで九十九頁であるから、廿八パーセント強まで書き進んだということになる。これはまさに「三分の一弱」である。

さて、この大作の構想は、同じく、『豊饒の海』について「で、三島はこう書いている。「さて昭和三十五年ごろから、私は、長い長い小説を、いよいよ書きはじめなければならぬ」と思った。しかし、いくら考へてみても、十九世紀以來の西欧の大長編に比べて、それらとはちがった、そして、全く別の存在理由のある大長編といふものが思ひつかなかった。第一、私はやたらに時間を追ってつづく年代的な長編には食傷してゐた。どこかで時間がジャンプし、個別の時間が個別の物語を形づくり、しかも全體

が大きな圓環をなすものがほしかった。私は小説家になって以來考へつづけてゐた『世界解釋の小説』が書きたかったのである。この『世界解釋の小説』なる「世界解釋」は「私の小説の方法」で、既に三島は述べている。つまり、『文體とは、小説家の世界解釋の據りところなのである』この「私の小説の方法」は昭和二十九年九月に『文章講座4』（河出書房）に載ったものである。又『豊饒の海』についての中で、『最近、古いノートが出て來て、私自身の記憶の不確かを知らせた。それは二十五年のノートで、二十五歳の私はしきりに長い長い小説を書きたがってゐる。しかし、『長さが何故に必要か？時間の長さ』人の一生、遺傳、累代、歴史、叙事詩、戦争、時間の擴張』などと書きちらし、『時間の長さ以外に、空間の要求する長さ。論理的構造の要求する長さ。それ以外に長さの必然性がありえぬか？』などとさんざん模索した末、『螺旋狀の長さ、永劫回帰、輪廻の長さ、小説の反歴史性、轉生譚』と書いてゐるところを見ると、それから十年以上、この想は私の心の奥深く埋もれて、再發見の時を待つてゐたのだと思はれる』と。

三島の言う通り、構想は、三十五年からではなく、二十五年にその端を発していたとすべきであらう。その構想の結実は、三島の言う通り、『無稽の擴大乘論』と『濱松中納言物語』とによる。ここから、論廻を基底として「夢と轉生」の物語が誕生した。古代のように夢を信じていた時代ならともかく現代においては、夢

を信じている儲かの人を除けば、「夢と轉生」では、小説としては形を成さない以上、三島は「認識者」としての「本多」を設定することによって現実性を加味し、小説としての形態をつくりだしたのである。

3

三島は、「春の雪」の巻末に、「『瀟松中納言物語』を典拠とした夢と轉生の物語である」と記している。三島の日本の古典への嗜好は、言うまでもなく、三島の学習院時代に、清水文雄氏の古典の講義に大いなる影響を受けていると見て差し支えあるまい。三島は、この物語のテキストとして、「全幅的に信頼しうる」ものと記し、昭和三十九年の松尾聡校注の岩波書店版の日本古典文学大系『瀟松中納言物語』を参照している。三島は、「これを何度も讀むうちに、私の小説はこれにこそ依據すべきだと考へた。それは唐に轉生した亡き父を慕うて渡唐する美しい貴公子にまつはる戀物語で、夢と轉生がすべての筋を運ぶ小説である」として、この物語を叩き台にした。「貴公子」というこの言葉の意味するように、三島の貴族趣味をも持ったものでもあった。『瀟松中納言物語』は、作中人物の中納言を主人公として、展開する。それでは、三島は、この物語の夢と轉生とのどのような面を典拠としたのか考えて見る。

作品を通して登場するという形式的な面から言えば、「中納言」と「本多」が照応する。しかしながら、「中納言」は、作品の中

にあって、常に中心人物であるが、「本多」は作品の中にあらがら、一方では、傍観者としての認識者であって、作品の外にいる三島を髣髴させる点が大いに異なってくる。絵でいえば、「中納言」は絵の中に収まっているが、「本多」は、比喩的に言えば、本体は、絵の外にあって、影が絵の中に入っているようなもので、額縁の中に収まっているのと収まっていないと言う相違がある。

この場合、本体は三島であるから、影としての本多に、巻を追う毎に、三島の影が色濃く反映して来るからでもある。また、「中納言」は、作品の中心人物という点から言えば、「清順」でもあり、「敷」でもあり、「ジン・ジャン」でもあり、「透」でもあるわけで、出発点は「清順」なのだから、「中納言」は「清順」と言ってもよいかも知れない。もっとも、「透」は途中から、贋物ということになるので、贋物と判明する前までということになる。『瀟松中納言物語』の手法が色濃く反映しているのは、言うまでもなく、「春の雪」なのであるが、三島は特に、失亡首巻の推定された内容を「春の雪」に採り入れ、夢と轉生を武器にして展開している。帝の御子の式部卿官に嫁すはずの大姫と中納言との契り、そして大姫の妊娠、突然の刳髪、そして尼と女子出産。一方、「中納言」は左大臣と母北の方との結婚により、左大臣の邸への行き来、大姫との交際。「春の雪」の中心的なものは、形態こそ違え、これらをそっくり採り入れている。「聰子」の場合は中絶。そして、渡唐という「中納言」の行為は、「清順」の死

という行爲となる。三島は「中納言」の思いをかける人物（亡き父、唐后、）の轉生を、逆に、卷々の中心人物にその役割を当てた。そして、これらの実現を夢で連繋した。つまり、『濱松中納言物語』の手法をデフォルメして採り入れているのである。まさに、三島が言う通り、この物語を「典據とした夢と轉生の物語」である。『濱松中納言物語』では、「中納言」が甦るのは唐であるわけだが、当時としての外国は、主として唐なのだから、当然であるが、三島は、韓国や中国は対象として選取せず、タイを選んだのである。なぜタイなのか。この問いに答えるためにも、まず、作品におけるタイに関わる箇所を見てみたい。

4

三島がタイ国現地を描写するのは、言うまでもなく、第三部において、国際私法上のトラブルで、本多がバンコックに来て、見物して歩くところであるが、タイに関わるものを全て取り上げてみると、第一巻から第三巻までは、何らかの話題として表現される。

巻一では、五章の親子三人の食事において、父親から、シャムの王子二人が日本へ留学する話から始まって、三十五章の王子たちの帰国まで、六章、八章、三十章から三十三章まで、と三十五章に描写される。

巻二では、三章において、本多が十九年前の思い出で、シャムの王子たちと一緒に遊んだことを寸描する所と二十二章で、本多が

六月のシャムの立憲革命のことを「或る總合商社の海外支店長」から聞く描写とこの巻の主人公である勲が留置所で見る夢に南国の描写としての三十三章である。この南国の夢は、テラスの描写が有ることから、カンボジャのアンコール・トムでの体験とクイでの体験の両方を含ませていると考えられる。

巻三では、第一部で、本多がバンコック見物とジャンバトラ姫に会う場面がタイに関するもので、第一章から五章、そして、十一章がこれに属する。第二部では、戦後の日本を中心として展開するが、ジャンバトラ姫、つまり、月光姫、シン・ジャンの名で、殆どの章が終始する。シン・ジャンの話題がない章を数えた方が、よいのであって、二十三章から四十五章のうち、二十三七・二十八・三十一・三十四・の五章が、シン・ジャンの話題のない章である。各巻の主人の有り方として、幼年と成人とを分けて、登場させているのは、この巻だけであって、しかも、二部に分かれているのも、この巻だけである。さらに、主人公に共通の三つの黒子の提示の仕方が、この巻に限って、四十四章という、最後から二つ目の章で、明らかにしていることである。「春の雪」では、五章の最後に、「奔馬」でも、五章の最後に、「天人五衰」では六章に示している。本多が確認するのは、「春の雪」では、三十二章、「天人五衰」では、十章であるが、「暁の寺」のように、最終章真近になって、示すことはない。最も、「天人五衰」では、黒子を示しながら、主人公は雙物として処遇される

のであるから、本多自身の認識も否定されたことになる。巻四では、夢にジン・ジャンの登場が、四章、透の誕生日のことで、ジン・ジャンの名が出るくらいで、タイに関わる描写は影を消すことになる。「豊饒の海」ノートによれば、最初は、「天人五衰」では、「本多死なんとして解脱に入る時、光明の空へ船出せんとする少年の姿、窓ごしに見ゆ」となっているが、悉く、三島は否定しきって逝ったことになる。

5

異国の地として、タイを選出した三島ではあったが、今日、残された彼の蔵書の一部として公開された『定本 三島由起夫書誌』には、タイに関した書名が、三冊見られる。

「泰・仏印の研究―現地調査報告」(国際経済学会編 刀江書院 昭和十七年三月五日)

「タイ国通史」(日本タイ協会編者 興亜日本社 昭和十七年五月十五日)

「タイ国森林地帯紀行」(ウィニヤード〔ノエル〕柴田賢一訳 幽城書店 昭和十七年十一月二十日)

恐らく、タイに関した資料は、もっと有ると思われるのだが、『書誌』には、外国語原書は省かれているので、翻訳されたものは、これだけであるかどうか私としてははっきり出来ない。公表されていない蔵書を見ることによって、さらに、タイに関する資料は増えるものと思うとだけ言っておこう。

これらの書のうち、『豊饒の海』に関わるものは、内容的には、『タイ国通史』であろう。三島は、『豊饒の海』では、ほとんどパンコックとバンパインとに描写が限られており、他に歴史的な説明が少しずつ見られる程度である。「春の雪」に出てくるシャムの王子二人は、ラーマ四世の孫とラーマ五世の息と言うことになっておりラーマ四世はモンクリット王であり、ラーマ五世はチュロンコーン大王であるから、日本では幕末から明治にかけての時代ということになる。「春の雪」が明治時代の描写に始まり、大正三年までの時間的幅だから、三島は、この二人のシャム王子たちもこの明治・大正時代に合わせた形となるのは当然であろう。タイの王室関係で日本を訪問したのは、歴史的には、明治二十年タイ国外相デヴァオング親王(王の弟)、明治二十三年パヌランシー親王(王の弟)、大正十三年、ラーマ六世の弟フラチャティホック親王(後のラーマ七世)、昭和に入ると、文相ターニー親王、ラーマ七世が来朝されている。このような事実を巧みに利用したのもと思う。私が、特に、関心があるのは、『奔馬』におけるタイの革命のことである。先に示したように、本多が、巻二の二十二章で、シャムの立憲革命を聞く箇所がある。「本多は裁判所で月一べん開かれる『時局調査会』で、この六月シャムで起った立憲革命の話をきいた。」そして、三島は、この革命について、簡単に、歴史的事実を、「たまたま革命に行き會った人の話を面白く聴いた」形で、略述する。「奔馬」は勲を中心に昭和維新を遂

行しようとしてならなかった過程を詳細に追った巻であるが、こうした過程にタイの革命を挿入しているのは、タイ国を胸中に懷きながら、作品を書き進めていることが、理解出来よう。そして、巻二が、昭和七年から、筆を起こしているのも、タイの革命が昭和七年だからであるとは私は判断する。巻二は、昭和八年の十二月三十日の朝で終わる。勲が捕まるのが、昭和七年の十二月一日であるから、勲の裁判と死までに一年の月日を費やして書いたことになる。それは、昭和七年が勲が十九歳なのだから、どうしてもぎりぎり、翌年の暮れまで、勲を生かさなければ、二十歳での死の完了がはたされないのでから、勲の裁判に多くを費やす必要があったのであり、また三島自身の刑事訴訟法を好むところからも、裁判に多くを割いたわけであろう。一方、昭和七年からの筆起しは、タイの革命をどうしても使いたかったからと判断する。ただ、この革命について、本多が聞いたことになるとは、十月である。二十章の冒頭が、「十月に入ると快晴の日がつづいた」で始まり、二十二章で、本多が東京出張を命ぜられ、「十月二十日の夜行で發つて」とあるわけだからである。六月の革命を十月に聞くのは、いささか遅すぎはしないか。四カ月以上も経過しているのは、本多のような、鋭敏な人間としては、ニュースに疎すぎる感がある。現実においては、「大阪朝日新聞」の昭和七年六月二十六日版で、この革命について、次のように報道している。

「『聯合バンコック二十四日發』二十四日シヤム王國に突如軍

部を中心として革命が勃發し、忽ちにして從來の獨裁君主制が覆り、立憲君主制が確立せらるゝに至つた、すなはち陸軍の謀叛部隊は二十四日突如何らの警告もなく徒歩で戰車數輛を先頭に大學してバンコックの街上に雪崩れ込み、忽ち王城を乗取つて最高國務院議席を有しかつ内相を兼ねてゐる皇弟バリトラ殿下、プラチャトラ殿下をはじめして皇族、閣僚その他政府の高官を王城内に幽閉した、一方これに呼應して起つた海軍がわ國王プラジャディボク、王妃ラムバイ兩陛下の避暑先ファヒンへ軍艦を派遣し、兩陛下に對して直にバンコック歸還を要請した、國王プラジャディボク陛下もこの要請を容れ、急遽バンコックに歸還されるものとみられてゐるが、革命派は王朝そのものを軸留せんとする意圖なく、依然プラジャディボク陛下の統治を要望するものゝ如く、『革命の目的は國王の絶對的權限を抑制し皇族を政治の實際より排擠し、かつ内閣の辭職を強行するにある』と宣言してゐる、革命が何らの抵抗を受けずして殆ど半日にして成就した結果、死傷者極めて少く陸軍參謀總長が部下の軍隊に抵抗したため射殺されたほか死者はなかった」との記事が見出しに続いて見られる。見出しは、一面の左上部に、「暹羅に革命勃發 政府大臣を悉く王城に幽閉 獨裁制から立憲君主制に」とあつて大きく出ており、さきに引用した文章に続いて、シヤム代理公使の談話が掲載されている。さらに、同日の夕刊の二面に、「シヤム革命」と四角で囲んで、「國王陛下御歸還 表面は平穩 在留邦人を極力反故 谷田

「部公使の公電」の見出しのあとに、第一公電から第三公電までを報じている。作品の中では、本多は大阪におり、当時、情報としては新聞は今以上に大きなウエイトを占めていたはずであり、三島がそれを知らなかったとは思われない。作品の中では、タイの革命については、年月日を正確に使用しているわけであるから、フィクションという前提に立って、事実を巧みに使用する三島としては、こうした新聞の記事の使用はいささか遅すぎはしないか。さらに作品では、本多に、「なぜ日本の革新は五・一五事件のやうな無益な流血にをはり、かうした穏和な成功に達することがないのかといふことを、思ひ較べてみないわけには行かなかった」と述懐させているのであるから、タイの革命に関してはこの作品の中の革命と関連させようとする意図は充分にあったわけである。本多は現実の認識者として登場しているのであるから、作品の中の時間設定において、この現実の新聞の報道の六月二十一日という事実を、作品の中では、十月になって、知るという設定は、作品の中の本多は、新聞を見ていなかったということになって、いささか片手落ちだと考える。三島が意識的に遅らしたのであれば、構成上のミスとしか思われない。それはともかくも、巻一の大正三年で終えたあと、巻二が、昭和七年からというのは、タイの革命を意識したものでなければならないだろう。三十三章の暎の夢の中の、熱帯と、女になる、という設定は、巻三への伏線としてのものであることは、論を俟つ必要はなからう。

三島が、『濱松中納言物語』を「典拠」として「夢と轉生」を軸に、『豊饒の海』を書いたわけであるが、日本だけに場所を限定していけないということはないが、「どこかで時間がジャンプし、個別の時間が個別の物語を形づくり、しかも全體が大きな圓環をなすものがはしかった」という三島にとっては、『濱松中納言物語』におけるように、日本と異国という物語の展開に興味を引かれたことはいうまでもないことであろう。『濱松中納言物語』では、「唐と日本」という二つの国にまたがったものであるが、これを踏襲するとなれば、現在の中國が、「異国」の場所ということになる。だが、三島は中國の地を、作品の中の場所としては選択しなかった。現在の中國大陸には、『設唐する美しい貴公子』という表現に見られるように、三島の「貴族趣味」を満たせるものがないばかりではなく、王様もなければ、皇帝もない世界であり、過去の榮華を偲ぶ遺跡や自然環境は存在しても、貴族の制度が存続していない以上、三島の感興を刺激することは出来なかったものと推断しなければならない。又、宗教に関しては、『豊饒の海』について、三島は「私は小説家になって以來考へつづけてゐた『世界解釋の小説』が書きたかったのである。幸ひにして私は日本人であり、幸ひにして輪廻の思想は身近にあった」と述べるように、「輪廻の思想」に基づく「轉生」を主たる武器の一つとしている以上、宗教的には、仏教以外にはその思

想的背景を求めるべき宗教はないと言わなければならない。中国大陸を物語の展開の場所として選択しない以上、三島は他の仏教国に、物語の場所を見出さなければならない。三島が、東南アジアを廻ったのは、そのためなのである。三島が四十歳以前に東南アジアを取材とした作品は書いたことがなく、またこれらの地を旅行したことは、かつて無かったことを注目すべきであろう。仏教国とすれば、釈迦を生んだインドをその筆頭に挙げなければならないのであるが、インドには既に帝国はなく、ヒンズー教が主たるものであり、ビルマのアラウンパー朝もなく、共和国であり、ラオスは第二次世界大戦中、日本軍によって、ラオス王国が誕生したが、戦後はフランスにひきつがれたが、現在は王国というものの、三島の食指をそそらなかった。三島がラオスへ一度は立ち寄っているのは、ただの旅行というのではなく、視察に寄ったのであろうが、視察だけに終わっている。カンボジアは、「蠟王のテラス」の戯曲に見る如く三島を引きつけた一つの立憲王国であるが、アンコール・トムもアンコール・ワットもワットアルン（暁の寺）の華麗さに負けたものと思わざるを得ない。ワット・アルンは、まさに三島好みである。ヴェトナムは二つの共和国となってしまうし、抗仏・抗日運動の展開があった国である以上、三島にとっては、候補地には出来なかったのは論を俟たないところであろう。フィリピンは、共和国で、スペイン・アメリカ・日本・アメリカと統治国の変遷の後、共和国となってい

るので、三島にとっては関心がなかったと思われる。三島は、韓国へも渡航してはいるが、それは、昭和四十四年十二月八日から四日間のことであり、『新潮』には、十二月号で、「暁の寺」第二部に入っており、第三十六章を掲載して、新年小説特大号としての昭和四十五年一月号は昭和四十四年十二月中に発売されていて、第三十七章を掲載、続く二月号は第三十八・九章を載せていて、発売は昭和四十五年一月一日の奥付けであるから、韓国へ渡航する際には、三島は少なくとも、三十七章までは脱稿していたと思われるので、この韓国行きは、『豊饒の海』とは深い関わりはないものと考ええる。しかも、韓国は既に王朝は存在していないのである。

7

「唐」にとってかわる国が、①仏教国であること、②王国であること、③なんらかの革命が絡んでいること、④華麗さが要求されること、の条件が必要であったと、私は考えるのである。もしも、仮に、韓国や中国大陸を選択すると、作品そのものは、あまりにも、『瀬松中納言物語』に限り無く近い構造となり、亜流を好まぬ三島にとっては、避けざるを得ないものであったろう。王国であることは、とりもなおさず、三島の貴族趣味を満たすものである。しかしながら、ただ王国というだけでは意味をなさないのであって、みやびさ、華麗さが伴っていなければならないのであり、「春の雪」がそれを物語っている。こうした傾向は、初期

の「文芸文化」時代の作品のみならず、三島の作品の底流をなしている。王国という場合、三島の側に立つと、宗教にも近い「天皇」に対する三島の精神構造を銘記すべきである。「みやび」の世界は、遠く、平安時代を想起させるわけであるが、「銀時計」のことを持ち出すまでもなく、三島にとっては、学習院時代における華族たちとの交流、そして、それへの「あこがれ」、また祖母による薫育などにより培われたものであろう。これらの要件は、三島の家の成長過程、つまり、祖父母、父母、そして三島を内包する時代に合致しなければならず、「春の雪」は、清順の十八歳からの物語で、大正三年の三月初めで終わるが、話はそれ以前に遡っているわけで、先にも記した如く、明治時代からである。タイ国とは、明治二十年、タイ国外相デヴァアオング親王（王弟）が来朝、九月二十六日修好宣言の調印、正式な外交関係が結ばれている。また、昭和十五年六月十二日、日泰友好親善条約が調印されている。また、昭和十六年十二月二十一日に、日タイ攻守同盟を結んでいる。「暁の寺」は昭和十六年から始まっているが、本田は十一月中旬に帰国しているので、大東亜戦争勃発前に日本へ帰ったことになる。昭和二十七年、日タイ両国の外交関係が再開されたが、「暁の寺」第二部は、昭和二十七年の春、本田五十八歳から始まる。その年、ジン・ジャンが十八歳で留学に来るのである。ここでもタイと日本との関係に関して、時期的にかさなっているのは、偶然ではあるまい。ここで、一つ忘れてはならないこ

とがある。それは、「花ざかりの森」の一節である。

「くちなはの更衣をはると、海への希みはそれより別なものにかはった。はかなくやさしい脱けがらのあとには、もっとあらはな、躍動したあこがれがまつてゐた。海のかなたに晴れやかなあやしい島影がうかび、島にはとむねをつくやうな色どりの衣をまとった人が住まひ、硫酸かなんぞの雨のやうにひりひりとした日のひかりが零りつづけてゐる、孔雀や鸚鵡があそんでゐる……ひそかな宗教、ひとしれぬ儀式がさかえる王国……そのやうなまぼろしをかの女は胸にいだいた。熱帯にゆくには海へひとまつ行かねばならぬ。海へのあこがれもそれ故にかききえずにゐた。……」幼少にして、熱帯へのあこがれが三島の胸中にあつたものと思われるのであるが、それは、一度はギリシャで実を結び、「潮騒」を生んだが、この「熱帯の海」への思いは、「唐」に代わる「異国」選びの理由の条件に、忘れるべきものではないと考へる。

8

三島が、タイを「唐」に代わる「異国」とした理由は、はっきりしたと思う。

①天皇貴族的世界を含めてに対応する王国、②その国の宗教が仏教を主たる国教としてゐること、③その国において、国内的の革命があること、④みやび、華麗さが雰囲気として国にあること、⑤熱帯の国であること、これらの条件を叶える国は、明治以降にお

いて、タイ以外には存在しないと思われるのである。

三島が身近な自分の家をも含めての自分を描いた『豊饒の海』は、『春の雪』において、①を内包した世界であり、『奔馬』において④を描くことによって、三島の改革への思いを述べたものであり、『暁の寺』においては、②と④と⑤を満たしたのであったが、『天人五衰』では、最初の構想とは違った方向へ向かう結果になってしまったもので、死を急がなければ、タイはこの巻にも描かれていたものと思う。しかし、三島は、この世にたいして、『記憶もなければ何もないとこへ、自分は来てしまったと本多は思った』という感慨を残して自らの夢の世界へ飛翔して逝った。

注一 三島は、バンコックで二度ホテルを換えたのであろうか。

夫人とともにオリエンタル・ホテルに宿泊したとすれば、ラマ・ホテルから十月十八日の日付でジョン・ネイスン宛の手紙は、どう解釈すべきか。オリエンタル・ホテルヘタマサート大学の知人であるプリヤー・インガピロム博士に、三島の署名が宿帳に記載されているかどうか調査を依頼したが、三島の頃のものは、破棄されていたので不明であった。なお、プリヤー女史は、現在、日本在中と聞く。

注二 ジョン・ネイスンによれば、『『春の雪』の主人公の化身の一人はタイのプリンスを予定していて、三島はアメリカ大使館の友人たちを通じてタイの宮廷への紹介を求めて手配を

していた。バンコックは、それ故、最後の訪問地であった』(筆者訳)とある。

注三 「蠟王のテラス」について(『三島由紀夫全集三十四巻』)

〔参考文献〕

「タイ國地誌」(能登志雄著・古今書院・昭和十六年七月十五日発行)

「タイ國史」(W・A・R・ウッド著 郡司喜一譯・富山房

・昭和十六年十二月二十五日発行)

「タイ國通史」(日本タイ協会編著 興亜日本社 昭和十七

年五月十五日)

「タイの文化」(常岡悟郎・六盟館・昭和十七年九月二十五日発行)

「日・タイ交流六百年史」(石井米雄・吉川利治著・講談社・昭和六十二年八月十日発行)

「Mishima A Biography」(John Nathan・Little, Brown and company Boston-toronto, 1974)

「THAILAND: A Short History」(David K. Wyatt・

Thai Watana Panich Yale University Press, 1984)

「A HISTORY OF THAILAND」(RONG SYAM-ANANDA Professor of History Chulalongkorn University, Thai Watana Panich, 1986)

〔付記〕タイの調査では、タマサート大学のプリーヤー・インガビ
ロム先生とチュラロンコン大学のサワラック・スリヤオ
ンバイサル先生に大変世話になった。記して感謝申し上げる。

又、石井米雄先生には「タイ国通史」をわざわざコピー
して戴き厚く御礼申し上げる。

なお、この小論は、日本文芸研究会第四十周年記念大会
の発表を基に、記したものである。

（岡山大学文学部助教授）

研究室受贈図書雑誌目録（六）

- 淑徳国文（愛知淑徳短期大学） 第二十九号、第三十号
樟蔭国文学（大阪樟蔭女子大学） 第二十六号
上智大学国文学科紀要 第六号
上智大学国文学論集 第二十二号
女子大國文（京都女子大学） 第四百号、第四百五号
女子大文学（大阪女子大学） 第四百号
叙説（奈良女子大学） 第十五号
信州大学医療技術短期大学部紀要 第十四巻
人文（鹿児島県立短大文学部） 第十二号
人文（京都府立大学） 第四十号
人文学報（東京都立大学文学部） 第二百七号

人文学論集（大阪府立大学人文学会） 第七集

人文学論集（佛教大学々々） 第二十二号

親和国文（親和女子大学） 第二十三号

成蹊国文（成蹊大学） 第二十二号

成城国文学（成城国文学会） 第五号

清泉女子大学紀要 第三十六号

説林（愛知県立大学国文学会） 37

専修国文（専修大学） 第四十三号、第四十四号、第四十五号

相愛国文（相愛女子短大文学研究室） 第二号

園田語文（園田学園国文懇談会） 第三号

地域言語（天理地域言語研究会） 創刊号

中央大学国文 第三十二号

中央大学文学部紀要 第六十三号、第六十四号

中京国文学（中京大学） 第八号

中古文学論攷（早稲田大学大学院中古文学研究会） 第九号

中世文学研究（中四国中世文学研究会） 第十四号

中世文芸論稿（龍谷大学中世文芸談話会） 第十二号

通信（東京外語大学） 第六十四号、第六十五号、第六十六号

筑波大学平家部会論集 第一集

鶴見大学紀要 第二十六号第一部

同志社国文学（同志社大学国文学会） 第三十一号、第三十二号

東横国文学（東横学園女子短期大学） 第二十一号